

SONRISA

# そんりさ vol.179



ニカラグア大統領選現地報告

マスクをつける人が目立つマナグア市内の市場

- |    |                                 |             |
|----|---------------------------------|-------------|
| 02 | ニカラグア大統領選現地報告                   | …柴田 大輔      |
| 06 | メキシコ市に留まるハイチの子どもたち              | ……グロリア・ムニョス |
| 12 | 回想のラテンアメリカ コチャバンバからサンフアンへ       | …唐澤 秀子      |
| 14 | ペルー音楽 ペルー・ジャズの離陸                | ……水口 良樹     |
| 16 | ラ米百景 民主街道を踏み外さなかったチリ            | ……伊高 浩昭     |
| 17 | メキシコ料理 コーンチップスとフリホーレス<br>のチーズ焼き | …ミゲル・アクーニャ  |
| 18 | ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み             | ……小林 致広     |

2022年1月15日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

# ニカラグア大統領選現地報告

柴田 大輔

中米ニカラグアで行われた2021年11月7日の大統領選は、約76%の得票を獲得したダニエル・オルテガ氏が、4期連続、5回目の当選を果たした。同日に行われた国会議員選挙でも、オルテガ氏が率いる与党サンディニスタ民族解放戦線（以下、FSLN）が、90議席中75議席を獲得し圧勝した。

しかし、今回の選挙に関しては、国際社会は厳しく非難し、その選挙結果を否定している。選挙を前に、政府は3つの野党の政党資格を剥奪し、7人の野党大統領候補を含めて、30人以上の反体制派有力者を逮捕するなど、「敵」を徹底的に排除したからだ。反体制派の拘束や拷問など人権侵害も報告されている。

11月、現政権の独裁制が非難されているニカラグアの現地を歩いた

## 一見穏やかな街の現在

「ニカラグアは拍子抜けするくらい穏やかな場所だった」。11月の初め、ニカラグアを陸路で通過したという旅行者のこのような投稿がSNSに流れてきた。

私がニカラグアの首都マナグアに空路で到着したのは10月31日、大統領選挙の1週間前だった。実際に現地に立ってみると、マナグア市内は大統領選挙前とは思えないほど静かで落ち着いていた。政府派、反政府派が対立していると聞いていたが、反政府デモや道路封鎖などの抗議行動は起きていなかった。

それどころか、街中で選挙活動らしい音や声すらまったく聞こえてこない。所々、街頭の電柱に貼られた選挙ポスターや横断幕を見かけることがあったが、現政権寄りの野党候補のものだけだった。圧勝が予想された現職のオルテガ大統領や、与党FSLNの選挙広告は、市内をいくら歩いても一切見ることがなかった。

2018年から2020年にかけて、私は毎年1・2回、マナグアに来る機会を得ていた。その時は市内の街頭のいたるところに、オルテガ大統領と妻のムリージョ副大統領が並ぶポスターが、選挙と関係な



貧困対策の恩恵を受けてきた人々がFSLNの勝利を祝う

く貼られていた。さらに大通り沿いに立ち並んでいる高さ30mほどに掲げられる大型広告看板には、大統領夫妻の写真を主とした政府広告が掲示されていた。それらも選挙直前のマナグアからは、なくなっていた。

これらのことについてニカラグアの元全国紙記者に話を聞くと、街頭で選挙活動を見かけなかった理由として、「新型コロナウイルス感染予防の名目で集会が禁止されていたからだ」と話し、それによって野党の選挙活動が制限されていたことを指摘した。

また、与党の掲示物がなくなっていたことについては、「大規模な反政府抗議を弾圧した2018年以降、政府への批判が増えた。それをごまかすために自分たちの掲示物を外したのだろう」とし、「なにより今回は選挙活動をする必要がないほど、彼らは余裕だった。もう楯突く敵はいなくなったわけだから」と、政府による「敵」の排除を指摘した。

彼がいう「2018年の弾圧」とは、2018年4月からの全国的な反政府抗議活動を治安部隊が武力鎮圧したことだ。国民の負担が増す財政改革案をきっかけに、オルテガ大統領夫妻の専制的な政治と汚職への国民の不満が爆発した。全国に波及した抗議活動に対して政府は治安部隊を投入し、銃弾射撃などで300人以上（600人とも）を殺害し、1000人を超える人々を拘束した。この間、刑務所などでの拷問が国際人権団体から報告されている〔そんりさ171号2020年1月参照〕。

## 反政府勢力を締め付ける法律制定

2021年11月の選挙に向け、オルテガ夫妻は「敵」を徹底的に排除した。

その皮切りは6月2日だった。野党の最有力大統領候補だったクリスティアナ・チャモロ氏が逮捕された。クリスティアナ氏は、1990年代に大統領を務めたヴィオレタ・チャモロ[1990年4月～1997年1月]氏の娘で、ジャーナリストとして活動してきた。クリスティアナ氏が代表を務めていた財団が米国の政府系団体から助成を受け、国内の独立系ジャーナリストを支援していたことが敵視されたとされる。ニカラグア政府は、同財団がマネーロンダリングを働いているとした上で、政府が制限する国外組織との繋がりも問題視した。

チャモロ氏逮捕ののち、ほかの野党大統領候補者をはじめ、政治家やジャーナリストら反体制派有力者が立てつづけに逮捕された。たとえば、与党FSLNの非主流派が結成した政党「革新民主主義連合（UNAMOS）」は、6月12日から13日にかけて、党代表、副代表ら5人が逮捕され、指導者不在に陥った。さらに、野党「自由のための市民たち（CxL）」をはじめとする3つの野党は、8月までに政党資格を剥奪され、大統領選挙に候補者を立てられなくなってしまった。その結果、選挙の前に逮捕された大統領候補は7人に及び、政党だけでなく政府に迎合してこなかった複数のメディア、NGOは、認可を取り消された。

一連の弾圧の主な根拠になっているのが、2020年12月に成立した「平和のための独立・主権・自決の国民権利保護法（法律1055号）」だ。在ニカラグア日本大使館によれば、この法律を根拠にして、市民の抗議活動を煽っていると政府に認定された場合は、国家転覆罪が適用される。また政権に対する国際社会の制裁を呼び込む活動を行っているとして認定された場合は、国家反逆罪が適用されるという。

法律1055号以外にも、反体制派を抑圧するために恣意的な運用を危惧されている法律が、2020年から翌年にかけて、矢継ぎ早に成立した。

2020年10月の「外国代理人規制法」もその一つだ。クリスティアナ・チャモロ氏逮捕の根拠とされたこの法律は、国外から資金提供を受ける活動の犯罪化を目的とし、ニカラグア国内のあらゆる団体は、送金元となる国外の個人・団体を「外国代理人」と



政府批判をした独立系メディア「100%Noticia」の事務所は警察に占拠され政府施設となっていた

して登録し、資金の用途を毎月政府に申告することが義務づけられた。国外から支援を受ける団体が、政府の意向にそぐわない活動することは、事実上、禁止されてしまった。

同じく2020年10月に成立した「サイバー犯罪特別法」は、公共の秩序を脅かすフェイクニュースが対象となっている。独立系テレビ局「チャンネル10」のジャーナリスト、ミシェル・ポランコ氏は、CNNの取材に対して、「この法律では、何がフェイクで、誰がそれを判断するのか明記されていない」と答えている。また、2021年1月には、「ヘイトクライム」に終身刑を設ける憲法改正案が議会で批准された。この同改正案に反対票を投じた野党・立憲主義自由党（PLC）のジミー・ブランドン・ルビオ氏は、反対した理由として、「ヘイトクライムとは何か定義されていない」と発言している。

## 強化される監視体制

一見して平和そうにみえる街は、敵を排除し、抗議を許さない体制を整えた上でのことだった。今回、私がニカラグア入国前に現地の知人に連絡すると、彼は私に「今の状況は以前と違う。反対派は皆捕まった。メディアの規制も以前と比較にならない。入国の時は特に気をつけたほうがいい」と、忠告してくれた。

今回の選挙についてもこれまで同様、政府系メディア以外の取材を政府はいっさい受け付けていない。国外メディアの入国も拒否されていた。私はいつものように、観光ビザで入国した。コロナ禍で世界的に行動が制限されているため、飛行機内の乗客

は3分の1程度、いつもは列をなしている入国審査も待たずに済んだ。自分のパスポートに押された出入国印の多さを指摘されないか気になり、緊張がばれないよう振る舞ったものの、意外なほどあっさり入国できた。

だが、滞在中は、以前の滞在ではあまり感じたことのない緊張を感じるようになった。選挙の翌日、市街地のガソリンスタンドで、ハンドタオルサイズのFSLN党旗をバイクの後ろにつけたFSLN支持者と見られる若者に一眼レフカメラを向けると、後ろから私服警官に呼び止められ、ジャーナリストであることの確認を迫られた。国会議事堂から800mほどのところで、正面には大型ショッピングセンターがある、日常的に市民の生活の中にある場所でのことだった。

また主要観光地の旧大聖堂前の広場でも、カメラ取り出すと、すぐに警備員に囲まれ「撮影禁止」を告げられた。その理由を聞くと、「規則による」と告げられた。大聖堂がクリスマスに向けたイルミネーションで飾られ、周囲には観光客が多数いる中でのことだった。別の場面では、市内のカフェでインタビュー中に、私服の人物にスマートフォンで撮影されることもあった。取材相手への影響とともに、自分自身恐怖を感じ、翌日から数日間は、マナグア市を離れることにした。

市民への監視は常態化し、より厳しいものとなっていた。マナグア市内の主だった交差点には、常時5、6人の武装警官が警戒している。バイクやピックアップトラックで市内を巡回する武装警官もいたる所で目にした。

今回、反政府デモに参加した経験者やその家族らに8件ほど連絡を取った。そのうち2人は身の安全を理由に国外に去っており、3人は取材を拒否した。訪ねることができたほかの3家族についても、政府が地域に張り巡らせる住民相互による監視によって行動が制限され、訪問客をチェックされるなど生活に何らかの支障をきたしていると感じた。

2018年の反政府デモに参加した息子を治安機関に殺害されたマルガリータさんは、事件を告発する中で殺害予告を受け取った。それでも国に留まる理由について、「私は年齢を重ね、体力、気力、経済的にも、日々の暮らして精一杯。国外で一から生活基盤を作ることは考えられない」と、苦しそうに話



マルガリータさんの息子は、反政府デモ参加中に治安部隊に拉致され、収容先での拷問で殺害された

してくれた。反政府的立場で国内に残るのは、消極的な理由からだった。別の家族は「いつでも逃げられるように」と取得したパスポートを見せてくれた。

### コロナ禍を乗り切る人々

コロナ禍の影響についても触れたい。マナグアの空港は閑散としていた。午前9時ごろ到着し、その足で向かった空港内にあるフードコートは、およそ3分の2が撤退し、4軒が残っているだけだった。国際バス「Ticaバス」のターミナルには、日々10人前後の乗客がいた。乗客の数はコロナ前より格段に減っていると聞いた。

国境を超える移動には、政府系の医療機関で150ドルかかるPCR陰性証明書のほか、ワクチン接種証明書が必要となっている。さらに隣国のコスタリカに入国する際には、コロナ感染しても入院治療を受けられるよう一定額の医療費と隔離期間の宿泊費をカバーする海外旅行保険への加入が義務づけられている。陸路移動でも、旅費以外に数百ドルの費用がかかるのが現状だ。

マナグア市内では、街を歩く人の大部分がマスクをしていた。お菓子やタバコを売っている露店でもマスクを買うことができる。一般的なものが1枚10コルドバ（約30円）、箱で買うと50枚100コルドバ（約300円）ほどだった。物価の安いニカラグアでも、毎日買うとなれば、安くはない。そのため、布製マスクを繰り返し使っている人も多かった。

ニカラグアでは、2018年の政治的混乱を機に、国内経済が悪化した。外資が撤退し、観光客は激減した。2017年まで4%台の後半で推移していた経済成長率は、2018年にはマイナス3.36%を記録し



マナグア市内の市場の精肉店。3代目のノエリアさん（右端）が、娘、孫、ひ孫と、日々店頭立つ



コロナ禍で仕事を失った多くの若者たちが、デリバリーサービス「Hugo」で働いていた

た。そこにコロナ禍が直撃した。IMFは2021年のニカラグアの失業率を、2000年以降で最悪の11.1%としている。

マナグア市街でタクシーを拾うと、初めて女性のタクシードライバーと出会った。コロナで仕事を失ったので、自分で稼げる仕事としてドライバーを始めたのだという。まだ少ないが、マナグア市内で女性ドライバーが増えつつあるとも話していた。

市場に行くと、悪いニュースと反対に、活気で溢れ、空き店舗はそれほど目立たなかった。新型コロナ感染が落ち着いていた時期だった。雑貨や家電、食料品を売る5つの商店に声をかけた。コロナ禍でも閉めなかった店が3店舗、ほかの2店舗も、新型コロナ感染者が出始めた2020年3月から4月に2週間から1ヶ月閉めただけで、それ以外は営業を続けていたという。

両親と家電販売店を営む男性は、市場での店舗営業と並行して、個人で受けるパソコン修理の仕事が途切れることがなかったという。その収入によって、両親の店を支えた。また祖父母の代から市場で肉屋を営んできた女性は、長年のお得意さんが買いに来てくれるなど、細々とだが、少ない売り上げを維持して、何とか乗り越えてきたという。周囲の人とのつながりによって、危機的な時期を乗り越えられた人が、現在も営業を続けており、一部には、店を拡大している人もいるということのようだった。

### 「自分の身は自分で守る」

市場で雑貨店を手伝っていた男性は、元来タクシードライバーだったという。2018年以降の政治的混乱とコロナ禍で観光客は激減し、地元住民の移動も減ってしまい、稼ぎを失ってしまった。当時の常

連客のつながりで、雑貨店の手伝いのほかにも市内の食堂などを手伝い、日々の生活の糧を得ている。

2020年4月、彼自身もコロナに感染した。当時のマナグアは新型コロナの感染拡大が著しく、病院は人で溢れていたという。死者も続出していた中で、政府は大規模な屋外イベントを主催し、国民の参加を呼びかけるなど、新型コロナ感染を防ぐための隔離措置とはまったく対照的な動きを見せていた。限界を迎えた医療現場からは告発する医師が解雇されるなど、新型コロナ感染の実情を隠す圧力がかけられた。大統領選挙に向けて、政治危機で傾いた国内経済へのさらなる打撃を警戒したためといわれる。

元タクシー運転手の男性は、「病院に行っても薬もワクチンもない」と、自宅にこもって、民間に伝わる木の根を煎じた茶を飲んだ。彼の周囲では、それを飲んだ感染者が続々回復したという。彼も10日ほどで回復したが、街へ出ても乗客はほとんどいなかった。タクシーを売って、日々の生活費に充てたという。「まったく仕事がなかったから、自然と自宅隔離になった。今、思えば一番危険な時に、一番安全なところにいたわけだ」と、当時を振り返る。

この男性は今の状況に関して憤っている。「この国では、自分の身は自分で守らなければいけない。政府は腐りきっている。人を騙し、嘘をつき、殺しても誰も裁かれない。まるで傲慢な王を抱く、古代王朝だ」。

そしてこう言葉をつなぐ。

「私たちは小さな世界で生きている。だから、信頼できる隣人と助け合って、危機を乗り越える。ニカラグアはいつか必ず良くなる。私たちは今の状況を克服する。希望はある」

# メキシコ市に留まるハイチの子どもたち

グロリア・ムニョス・ラミレス (Desinformémonos 編集長)

2021年には2万6千人のハイチ出身者が、メキシコへの難民申請を提出している。その数は、2019年と2020年の4倍に相当する。メキシコ政府側の対応がないまま、数百人のハイチの子どもたちが9月からメキシコ市に留まったままである。

## メキシコ市

壁画や天井のガラスで囲われた共同住宅の中庭で、ポールとイサクとほかの二人の子どもが、ベンチに座っている母親の注意を引き、飛び跳ね、叫んだり言い争ったりしながら走り回っている。メキシコ市北部のサンタマリア・ラ・リベラ地区には、「コムニダー・ヌエバ」という組織がある。この組織は、近隣住民とともに、文化活動や環境保護、健康キャンペーンなどを行っている。この地区は、メキシコ市のジェントリフィケーション〔低所得層が居住する都心部の再開発事業〕に抵抗しているエリアである。今も、この地区は小さな店、屋台食堂、市場、飲み屋、崩れかけた共同住宅があり、喧騒に満ちている。

2010年の地震〔2010年1月、マグニチュード7.0、死者32万〕の後に、ハイチでボランティア活動をしたメキシコ人のパトリシア・ララ(51歳)は、レンガ職人であるとともに、アートセラピーのファシリテーターで、活動家である。彼女は、この街を通過したり、滞在したりしたハイチ人の家族たちに付き添ってきた。

彼女は、ボランティアの仲間と「コムニダー・ヌエバ」のスペースで子どもたちのアートセラピーのセッションを行っている。少しずつではあるが、「旅が意味しているものから、子どもたちを徐々に引きずり出し、家に引きこもらず、街に溶け込める」ようにしているという。

ベレニスの息子ポールに質問した。

「お名前は？」

「ポール」

「何歳？」

「4歳だよ」

「どこから来たの？」

「旅行中よ」

「両親はどこ出身？」



コムニダー・ヌエバで遊ぶ  
ポールとイサクたち



ポールとアートセラピー  
をするパトリシア

「旅行中よ」

「チリでは何をしていたの？」

「幼稚園に行っていた。早く学校に戻りたい」

こう答えると、私たちの次の質問を遮った。

ポールは、2021年9月に南米諸国からのグループと一緒にメキシコ市に到着したハイチ人を親とする何百人もの子どもの一人である（正確な数は不明）。子どもたち2カ月以上も学校に通わず、なかば身を隠すように、必要最低限のものだけで生活している。親たちは難民申請の許可を待っている。メキシコ市に住むハイチ人家族の多くは、忘れ去られた状態、あるいは自宅監禁状態であるともいえよう。

おもにチリとブラジルを出発した約1.5万のハイチ人が、コロンビアとパナマの間にある危険なダリエンの密林を越え、8カ国を経由し、去る9月に米国テキサス州デリオとメキシコのコアウイラ州シウダー・アクーニャの国境に到着した。

ユニセフの推計によると、3人に2人は、女性、子ども、青少年だった。しかし、ほとんどはハイチに送還された。ハイチにおける暴力、ギャング、政治・経済的危機、自然災害などが、出国を選択せざるをえない主要な原因とされている。

メキシコ難民支援委員会(COMAR)の報告では、2021年は記録が始まって以来、難民申請数をもっとも多い年になるという。現時点で〔9月末〕で、10.8万件のうち2.6万件がハイチ人とされる〔11月末で12.3万のうち4.7万に増加〕。

難民申請に対する回答は3,216件で、肯定的な回答が943件、否定的な回答が2,273件(70%以上)となっている。市民社会が運営する移民シェルターが危惧しているのは、残りの約2万3千人のハイチ人が、いまだに何の対応も受けておらず、

どうしようもない不確実な状況に直面していることである。

6歳のイサックは、コムニダー・ヌエバの運動場で遊んだり絵を描いたりしているほかの4人の子供と同じスウェットシャツ、真新しいテニス・シューズ、ジーンズ、赤い帽子を身に着けている。目元に笑みをたたえながら、レコーダーに向かって奔放に話しかける。

イサックは、6年という短い人生の半分をハイチ、半分をチリで過ごした。現在、ブエナビスタ地区にある他のハイチ人家族が暮らしているホテルの一室で、彼はポールと一緒にほとんどの時間を過ごしている。母親はCOMARに避難申請を提出したものの、回答がなく、働く権利がないため、街中に出かけることはほとんどない。難民申請中には強制送還がないことは知っているが、それでも恐怖や迫害感は消えないという。

メキシコ市は2千万人以上が暮らしている世界で最も人口の多い五大都市のひとつだが、ハイチ人の肌の色は大都市に溶け込むことを妨げる。2020年の人口住宅センサスでは少なくとも25万人のアフリカ系住民が市内に住んでいる。その多くが肌の色に関連した差別に直面していることが、2017年の全国調査で確認されている。

ポールの母ベレニスは、頑健な手足で背が高く、複雑な髪の編み込みをした女性である。彼女は息子から一瞬たりとも目を離さない。31歳の彼女は、ドミニカ共和国で暮らした経験があり、流暢なスペイン語を話せる。

彼女は勉強のためにドミニカに行ったが、そこでは仕事が見つからず、「同じ色なのに」、ひどい人種差別を受けたという。そこで、お金を貯めて、2015年に飛行機に乗り、労働許可のないまま、観光用の3ヶ月ビザで、チリに向かった。「チリでの暮らしは簡単ではなかったが、それほど難しくはなかった」と言う。しかし、問題だったのは、「労働許可書が出なかったことです。3・4年も働いても、不法滞在とみなされていた」

チリのバチェレ政権下[2014~2018年]では、「それほどひどい差別はなかったが、ピニェラ政権[2018年3月]になると、それも終わった」と、ベレニスは述懐する。彼女はサンティアゴ市のコンチャリのコミュンで暮らし、そこでポールが生まれた。彼女は工場の作業員や病院の清掃員として働き、夫は化粧品の研究所で働いていた。



コムニダー・ヌエバで寛ぐ  
ベレニスやほかの家族



CAFEMINの敷地内で人形を  
もって遊ぶ子どもたち

ある日、夫婦はテレビ、家具、冷蔵庫、洋服などすべてを売り払い、家のドアを閉め、「旅行」に出た。旅行は、幼いポールが自分で考えた原点であり目的地でもあった。

一家はチリ北部のイキケまで飛行機で行き、ここからは、バスでボリビア、さらにペルー、エクアドル、コロンビア、そしてパナマまで移動した。パナマに着く前には、「ダリエンの密林を8日間も歩き続け、大きな川は人間が手を繋いで渡った。生と死の狭間にいた。足を折った人、川に流された人、泥棒に殺された人、何かを要求されたが何もないため殺された人。私はすべてを見た」

母親が話をしているあいだ、ポールは紙にさまざまな色合いの緑の木や葉を描いている。彼は地獄のことを覚えていないようだ。

「私は泥水の味を覚えている。だが息子は知らない。川の水を与え、スープしか飲めなかった。何もないので、あの泥水を飲み、雨の中で寝なければならなかった。そのため、今の病気になってしまった。息子はずっと泣いていた。彼にとっては残酷なことだった」

パナマからコスタリカ、ニカラグア、ホンジュラス、グアテマラを経て、メキシコ・チアパス州タパチュラまで、全行程をコヨーテ[仲介業者]に案内された。コヨーテは合計3,500ドルの旅費を請求した。コヨーテの仕事は、国境に依頼者を届けるまでである。

幼いポールを抱いたベレニスが走っていると、一人のメキシコ人の男性が家のドアを開け、入管の職員や国家警備隊[AMLO政権が2019年6月から南部国境に配備]から家族を救ってくれた。国境のタパチュラを出発した後、小グループに分かれ、彼女はほかの家族と一緒にバスでメキシコ市まで旅を続けた。

そして、宿を探して市内をあちこちと巡り歩いた末、一つのホテルが小さな部屋を貸してくれる



リオ・グランデ川堤防で難民を鞭打つ国境警備隊 (9月21日)



CAFEMIN の中庭で遊んでいる子どもたち

CAFEMIN 代表のシスター、マグダレナ・シルバ

ことになったという。

「ポールはそこが家でない知っているから、『旅行中』と言っているのよ」と、母親は言う。

### 避難所は対応したが、溢れかえっていた

到着国、あるいは米国に向かう通過国としてメキシコを通過する移民の男女や子どもの流れは、パンデミック下でも止まらない。今年11月、中米、ハイチ、キューバ、ドミニカ共和国、南米の一部の国からの数千人のキャラバンが2つ、メキシコ領内を横断している。彼らの多くはアメリカンドリームを求めている。

しかし、ハイチ人の家族の場合、少なくとも9月グループの大多数は、「メキシコに留まり、そこで働くことを望んでいる」と、市北部にある移民シェルターの一室でインタビューした「移民避難女性の保護・育成・自立の家 (CAFEMIN)」代表のシスター・マグダレナ・シルバ・レントリアは指摘する。ベレニス、クロード、フランソワ、ポール、ルシネ、エティエンヌ、マリーなど、インタビューした十数人の女性もまったく同じ気持ちであると表明している。そのことは、COMARの統計数値によっても確認できる。

9月に放送された米国テキサス州での強制送還や移民局による虐待の映像 [国境警備隊が騎馬でリオ・グランデ川に蹴落とす様子] を見て、遅れてきた人たちは米国国境を目指すことをやめたのである。メキシコ市をはじめ、各地に散らばり、今も仕事がないまま、移民シェルターや民家に隠れ、路上生活をしている。

カサ・トチャン (Casa Tochán、ナワ語で「我々の家」と CAFEMIN の移民シェルターが行った推計によると、大人と14歳以下の子どもを含めて、約2千人のハイチ出身者がメキシコ市に滞在している。

バジェホ地区にある市内最大の移民シェルター CAFEMIN 代表のシスターはインタビューで答えた。彼女は、「AMLO 政権の移民政策は米国の

意のままだ」と断言する。「移民の緊急事態は市民社会の運営する移民シェルターが対応している。だが、政府は移民シェルターに対する支援を減らしている」と、付け加える。

9月、2千人以上のハイチ人がメキシコ市に到着したとき、市当局は30人分のスペースしか提供しなかった。「昔も今も、市当局は何も対応してはくれない」と、CAFEMIN 代表は言う。

移民シェルターの中庭は、干された服、椅子や床に座るハイチ人の男女、寄付された玩具で遊ぶ子どもで溢れかえっている。定員は100名で、ハイチ人は196名、そのうち40名は生後3ヶ月から13歳までの子どもである。

ほとんどは、ブラジルやチリで生まれ、ハイチを知っている子はほとんどいない。日中は中庭で過ごし、宿泊所は夜8時まで開き、彼らはベッドと食事が確保されている。

一方、メキシコ当局の避難民への対応はどうしようもないものだった。3ヶ月を超える旅の末に到着した子どもは、痙攣を起こした生後3ヶ月の赤ちゃんを含め、全員が「病気と栄養失調」状態だった。「皮膚は厳しい太陽光線と寒さのために乾燥し、埃のように剥がれ落ちた。多くのストレス、不信任感、恐怖感を抱えた子どもたちは、眠ることもできず、泣き続けていた。ダリエンの密林で多くの死を目撃した彼らは、すべての経験を胸の内に秘めている」と、CAFEMIN 代表は語る。

ほとんどの子どもは、言葉を話したばかりで、どの言語も話せない。両親がクレオール語やフランス語で話すのを聞いたりするが、それ以外の生活はスペイン語で行われる。だから、彼らや大人たちがスペイン語を覚えることをまず優先しなければならないと、シスターは言う。

メキシコ市内の各地で集められた証言は、ハイチでの悲劇、チリやブラジルでの悲劇、メキシコへの出発、国境への到着、首都での悲劇について、

繰り返し語っている。ダリエンの密林での体験として、川で溺れる子ども、少女や女性へのレイプ、ギャングによる殺人や誘拐、飢えや渇き、極度の疲労などの話を聞くことができる。インタビューしたすべての女性が、つねに死と共存していたと口にしてきた。

カサ・トチャンは、ノーベル平和賞受賞者リゴベルタ・メンチュなど、1980年代にエルサルバドルやグアテマラの内戦から逃れてきた人々の避難所となった家である。迷路のような造りをしているため、寝室、事務所、作業場、台所などの施設を上り下りすることになる。

代表のガブリエラ・エルナンデスは、2011年から移民を受け入れ、通過する人の流れの変容を目の当たりにしてきたと言う。一人の男性から、家族全員、そしてこどもの数もどんどん増えていったと言う。

去る9月にハイチ人のグループがメキシコ市に到着したときは、路上での宿泊を防ぐため、シェルターは全員を受け入れなければならなかった。それほど、多くのハイチ人があふれていた。その後、ほかのシェルターとの会議で、家族や女性はCAFEMIN、男性はカサ・トチャンに収容することになった。

カサ・トチャンの代表は、AMLO大統領が「移民のためには何もせず、僅かばかりの小さな成果までも台無しにしている」と、批判する。現在のように移民が移民警察に迫害されているのを見たことがないと言う。

以前なら、そのようなことがあった場合、抗議活動があったと彼女は振り返る。その結果、中米移民の流れが北の米国へ向かわないように移民をメキシコ南部国境に封じ込めようと、2015年にエンリケ・ペーニャ・ニエト大統領が打ち出した軍隊を動員した「南部国境計画」をある程度は抑止できた。しかし、AMLOの政策には抗議行動を展開できていない。

COMARは、難民申請に対して30日以内に返答しなければならないが、認定に4ヶ月もかかるという。その間、市当局は彼らへの避難場所の提供を拒否していると、ガブリエラさんは言う。「それは実際に起きていることを完全に無視している」と彼女は指摘する。

「ハイチ人の大半は難民の範疇に入らない」という当局の立場は、彼らをびくつかせるものである。COMARによると、難民と認定されるには、



カサ・トチャン代表の  
ガブリエラ・エルナンデス



身代金支払で解放されカサ・トチャンに避難のハイチ人

出身国に戻ると、生命、自由、安全が危険にさらされることを証明しなければならない。ハイチ人はこの条件を十分に満たしている。

しかし、「問題となっているのは、9月の到着グループは、ハイチから直接来たのではなく、以前住んでいた国から来たということである。滞在していた国で、彼らは一緒に移動している子どもたちを生んだ」と、ガブリエラは付け加えた。

### サント・ドミンゴ、とても友好的な近隣地区

ロス・ペドレガレス・デ・サント・ドミンゴは、メキシコ市の南に位置する地区 [国立メキシコ自治大学キャンパスの東側] で、ちょうど50年前 [1971年9月] に1万5千人が移住してできた。ラテンアメリカ最大の集落と言われ、国内の様々な州からきた異なる言語を持つ先住民のコミュニティが設立された。現在、12万人以上の人々が暮らし、その数はさらに増え続けている。

街中の治安の悪さの一方で、ホスピタリティの高さでも知られているのはとても逆説的である。ここでは、肌の色や言語は差別の理由にならず、家賃も手頃である。そのため、ハイチ人家族がやってくるようになった。

中庭では、ハイチ人の母親を持つ女の子2人と男の子1人が、近所の金髪の娘と遊んでいる。しかし、歴史は繰り返す。彼らはほとんど街に出ない。「外に出れば、見つかって強制送還されるのではないかと恐れている。子どもたちを散歩に連れ出すことができる書類が届くのを待ちながら、子どもたちと家に閉じこもって過している。

インタビューした2人の女性のうちの1人、ソフィー（仮名）は、正面からの写真撮影を拒否した。その理由は、セキュリティ上の問題ではなかった。「ハイチの家族が私たちの状況を知ることになるでしょう。私たちが稼ぎ頭なので、見栄えが悪ければ、ハイチにいる家族は動揺してしまう」



サント・ドミンゴ地区に暮らすソフィーとアナ

からだという。

「この年頃の息子は、ほかの子と一緒に遊んで成長すべきでしょう。だが強制退去があるので、家の中で過ごすしかないのよ」と、半分空っぽのアパートで肘掛け椅子に座ったソフィーが言った。

ソフィーの友人アナ（仮名）は、COMARで手続きをしたものの、まだ返事がないと言う。「メキシコに着いても、書類なしでは何もできないわ。それは基本中の基本よ。在宅で作業できるラベル張りの仕事の面接を受けるため、1日に2カ所も回ったことがあるわ。だけど、連絡はまったく来なかった」と、嘆いている彼女だが、諦めるつもりはないという。

二人ともチリから来た。チリでは働くことはできたが、差別を受けていたという。だが、ここサント・ドミンゴ地区では「人々はとても親切なのよ」と、ソフィーは言う。

「この地区では、お金ではなく、優しきで助けてくれる。仕事がなくとも、幸せよ。チリでは差別されて、泣きながら仕事していた。バスの中では、『国から出て行け。ここには黒人はいない！』と怒鳴られたこともある。ある時、息子が『ママ、僕は学校に行きたくない』と言ったので、理由を尋ねると『黒人だから、ほかの子どもたちが僕と遊ぼうとしてくれない』と答えた。こんなことはどこでもあるが、そんなことが少ない方がいいに決まっている」。

サント・ドミンゴでは、お互い対等な関係にあると感じている。彼らにとって、国外追放という選択肢は考えられない。「私たちが殺すようなものよ。とても簡単よ」と、アナはクレオール調だが理解できるスペイン語で話した。

「ハイチでは何もかも困難よ。とても危険で、誰もそこに住みたいとは思わない。いつ自分の子どもがいなくなり、誘拐されるかもしれないし、お金がなければ殺されるかもしれない。外にはマチェテを持った人がいて、外出できないことが何度

かあった。息子はチリで生まれたが、私がハイチで経験したことを息子には絶対に経験してほしくない。だから、私は、どこでもいいからほかの国、たとえ苦しくても安全なところに行きたい」

アンによると、2017年に妹が殺されたので、チリに飛行機で向かうことを決心し、その4年後、メキシコに向かうことになったという。

### カフェ「ラ・レシステンシア」：緊急事態に対処したのは昔も今も市民社会

9月23日の午後、数十人のハイチ人家族がCOMARの前に並びだした。「移民家族地域ネットワーク」の創設者であるアナ・エナモラドは、食料や宿泊場所を持たない子どもを連れたグループが到着しているという連絡を受けた。市内中心部にあるホテルは、お金を払うと言っても、宿泊させなかった。

ホンジュラス出身のアナは、2010年にハリスコ州で行方不明になった息子のオスカル・アントニオ・ロペスを探しにメキシコに来た。現在、彼女は息子を探し続けるだけでなく、メキシコを通過する移民の権利を守る象徴的な存在となっている。

あの9月の午後、首都にある移民シェルターはどこも人で溢れかえっていたと、彼女は振り返る。必死になって、路上に溢れる家族の写真を撮り、自分のSNSにアップした。

「彼らを路上に放置することはできなかった」彼女は、仕事場でもある小さなカフェ「ラ・レシステンシア」の同僚に連絡し、彼らを支援するためにドアを開け募金活動を開始した。その時から、このカフェは移動する人々のコミュニティの出会いの場となった[中心部のクーバ通り34番地]。

「空腹の子どもたちは、泣いてミルクを欲しがっていた。しかし、私たちには何もなかった。政府はどうすればいいのかと尋ねてくることもなかった。支援する予定もないと言った」と、彼女は振り返る。生後数ヶ月の子どもを持つ多くの夫婦の緊急事態に対応したのは、今も昔も、市民社会だけだったと彼女は説明する。

「大人が子どもを盾にしてメキシコ国内を通過しようとしている」という主張は、まちがいでであると、アナは指摘する。「彼らが求めるのは尊厳ある生活である。手当てで生活するのではなく、働きながら、子どもとともに前に進むことなのです」と、彼女は強調する。

しかし、彼らが遭遇するのは、人種差別や階級



移民家族地域ネットワーク  
創設者のアナ・エナモラド



ラ・レステンシアの前で  
遊ぶハイチの子どもたち

差別である。「同じ言葉話していないが、肌の色でメキシコの出身ではないとわかり、『望ましくない』人とみなされる」。連邦政府の言説や行動がこうした差別をさらに助長していることも、アナは指摘する。

移民問題に揺れていた9月24日の朝、AMLO大統領は、「メキシコを移民の収容所にするのではない」と宣言した。

### メキシコには封じ込め政策でないものを期待

連邦政府にはハイチ人家族の不安を解消しようという政治的意志がないという点で、CAFEMINのシスター・マグダレナ、カサ・トチャンのガブリエラ・エルナンデス、そして移民問題の専門家ラウラ・カールセンの意見は一致している。

現在、必要とされるのは、彼らの滞在を認めて、働けるようにし、子どもたちが、閉じ込められている場所から出て、ほかの子どもと同じように勉強し、遊ぶことができる仕組みを当局が構築することであると、3人は主張する。

ハイチから直接メキシコに来てはいないという理由で、彼らの難民認定を拒否することは、法的な根拠を欠いている。多くの人はい前いた国（ブラジルやチリ）の市民権を持っていないので、そこには強制送還できない。ましてや、ハイチに強制送還することは、彼らにとっては死を意味するものでしかない。

米国とラテンアメリカの国際関係に関心のある活動家やアナリストのための資料・情報センター Americas Program の責任者ラウラ・カールセンは、移民問題や米墨関係の専門家で、国際移住機関や Nobel Women's Initiative で活動している。現在のメキシコ政府の移民政策に、「封じ込め」という基本方針があることを、彼女は指摘している。

「AMLO 政府は、従来のメキシコ政府とは異なってきたまったく別のパラダイムを約束していただけに、極めて残念である。メキシコ政府は、前大統領

トランプが始めた移民排除政策に反対するどころか、共犯者になってしまったことに驚いた人も多いと思われる。家族の分離、事情聴取を抜きにした強制送還、亡命の権利の否定など、移動の権利や移民の権利をメキシコの現政府は完全に否定している」と、彼女は指摘する。

バイデン大統領はトランプが始めた移民封じ込め政策を継承した。それに応じるかのように、「メキシコ政府は、別の主権・人権政策を展開するという意図を完全に捨てた」と、彼女は付け加える。

3人の専門家は、COMAR は人道的ビザの交付という新しい難民認定の基準を準備すべきであると指摘する。「メキシコはこのような人々を十分に吸収する能力を備えているはずだ」と、カールセンは付け加える。

従来の研究によると、移民の人々は、機会があれば、自分のためだけではなく、そこではハイチ人は勤勉さと決断力で地域の生活に溶け込んでいることが明らかにされている。「子どもたちもスペイン語を学び、自分たちの文化やアイデンティティを失わず、すんなり学校に溶け込んでいる」と、カールセンは語る。さらに「移民の組織形態、抵抗して生き延びる能力、喜びながら実行する能力は、私たちに希望を与える」とも、断言する。

移民の人たちがほかの人のためにも仕事や資源を生み出すことも指摘されている。代表例は、北部国境の街ティファアナ市のハイチ人居住区「リトル・ハイチ」[2016年頃設立]の事例である。

市民社会が連帯しながら今後も対応すれば、別の道が開けるかもしれない。人道的な選択肢の提供は、本来はメキシコ政府の役目である。だが、インタビューした人の多くは、メキシコ政府当局には、ほとんど何も期待していないという。

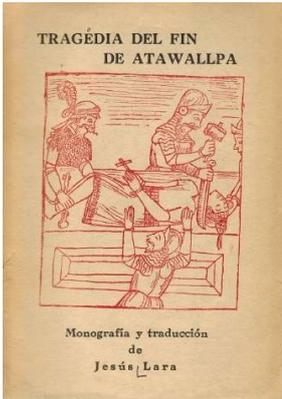


ティファアナ市アラ克蘭谷にあるリトル・ハイチ

出典：Gloria Muñoz Ramírez, “La niñez haitiana varada en la Ciudad de México”, Desinformémonos, 12月10日  
翻訳：小林致広

### アタウワルパの最後

ヘスス・ララ氏に再びお会いすることはなかったが、チリまで南下した後、ペルーまで戻ってきたとき、ララ氏の作品『Tragedia del fin de Atawallpa』に思いがけず出会ったのです。インカ帝国最後の皇帝アタウワルパがスペイン軍との戦いに敗れ、処刑されるまでがケチュア語で語り継がれてきたもので、ララ氏がスペイン語に翻訳していたのです。



リマの街角で「アタウワルパの最後」上演というポスターを見て、観にいったのです。いまになると、どうやってその場までたどり着いたのか記憶が定かではないのですが、町中を外れ、木々が茂る郊外のどこか野外劇場で上演されたのです。

街道からその劇場までの車一台が通れるほどの道には篝火がたかれ、すでに劇のなかにいるような雰囲気です。

劇のテーマの当時は無論スペイン人はスペイン語、アタウワルパやインカの人びとはケチュア語で話していたわけですが、劇中ではその両者のやりとりはすべてスペイン語だったのです。言語の違いをどのように現すかと思っていると、若い、少年と青年の間くらいの年齢の男性が通訳として登場し、木片を束ねた楽器を手に持ち、スペイン人が話すときはインカの人びとの方に向かい、インカの人びとが話すときはスペイン人の方を向き、両者のスペイン語のせりふをその楽器で奏でた、としか言いようのない、表現をしたのです。言葉が激してくれば、激しく打ち鳴らされ、思いに沈むようなときはそのように、そして全身で恐れと悲しみが表現され、見事な設定でした。いまでもその通訳を演じた俳優の姿が思い出せるくらい、印象に残っています。

ララ氏にこの舞台を見て、侵略者の武力に敗れた側の通訳の恐れと悲しみをとおして、

この劇が深く感じられたことを知らせたところ、とても喜んでくださってお手紙をいただいたのが、ララ氏の最後の記憶です。

### コロニア・サンフアンへ

さて、わたしたちはコチャバンバからサンタクルス経由でサンフアンへと、バスの旅を続けました。コチャバンバは海拔 2500 メートルくらい、そこからだんだん高度を下げているのですが、窓の外の風景がそれにつれて変わっていき、気温が高くなり湿り気も感じられるようになります。木の緑が濃くなり、サンフアンへ着くころは、もうまったく違う熱帯的な世界です。

日本人移住地であるコロニア・サンフアンに着いてみると、いきなり昭和 30 年代の日本がそこにあった、というのが正直な感想です。田んぼや畑が広がり、役所という感じの建物、食堂など、木造の建物がいくつかあったという記憶があります。コロニアの中心地に民宿や食堂があり、そこに泊めてもらったのですが、家の庭にはドラム缶のお風呂がすえられ、薪がくべられて、久しぶりにお風呂に入れてもらい、田んぼを渡ってくる風の涼しさとともに気持ちよかったことが思い出されます。お昼は近くの食堂で食べたのですが、白米のご飯に味噌汁、お漬物が出され、食堂の女性たちが、私たちがここでお米を作るようになって、ボリビアの人たちもお米を食べるようになったのよ、と、誇らしげに話っていました。

たぶん宿で移住された方の話を聞きたい、と話したことからだと思うのですが、それでは KM14 の H さんを訪ねたらいいと教えられ、宿のあたりはこのコロニアの中心地である KM12 なので、2 キロほど先にある H さんのお宅を訪ねてみました。このあたりは中心地からの距離が住所となるようです。H さん宅へ伺う道は田んぼ、畑を突っ切ってかなり広いのですが、舗装はなく、目の前を優に 1 m はあるような大きな蛇がゆっくりと横切って、ぼちゃんと道路脇の水たまりを泳いで草の中へ消えていく姿に思わず、ひゃー。こわい！

## 日本人移住者の話

Hさんのお宅では、Hさんのおばさん（夫婦を指す時、日本語では、「ご主人」「旦那さん」「奥さん」という言葉が一般的ですが、私が田舎で使っていた「おじさん」「お婆さん」の方が親しみがあり、より現実の感じに合っているように思うので、ここではおじさん、お婆さんを使います）がおひとりでした。

「いま卵を出荷するように、大中小に分けているのだけど、鶏は1000羽くらいかな。一日に卵は1200個くらい出るね。これはみんなラパスに出荷するんだわ。庭の方には日本から種を持ってきた植えた温州みかんやザボンがもう大きくなって実をつけるし。これ、柿ね、先に来ていた人たちみんなには、柿なんて、と反対されたけど、持ってきたの。そうしたらね、いまは実がつくようになって、こんな果物、こちらにはないの。それでラパスで高級なお店や日本人の商社の人とかによく売れるんだわ」と話しながら庭を案内してくれ、移住して15年、少しずつ先のことを考えながら築いてきた日々を話してくださった。

お婆さんは、スペイン語はあまり読めないのだけど、といいながら、サンタクルスの日本領事館からスペイン語版の日本紹介のグラフ誌をもらってきて、そこに取り上げられた日本史概説などを読んでいる。「わたしは日本の歴史に興味があって、邪馬台国は、ほんとうにどこにあったのだろう、どことなくにだったのだろうね、知りたいことばかりだけどね…」といって、話はいくらでも出てきて尽きない。お昼時になったし、農作業もあることなので、いったん帰ることにすると、「夕方からは時間があるから、またおいで」と、誘っていた。

夕方、約束通り訪ねると、お婆さんにとっては、思いがけないことだったらしかった。歩いて往復4キロ以上の道のり、「はじめて来てくれた人を引き留めても悪いと思ったし、こんな田舎のお婆さんと話したいと思ってくれるなんて…、それなら鶏でもつぶして料理すればよかった」というお婆さん。「うちの畑で採れたものだよ」と、いんげんやピーマンなどの炒め煮をご馳走になりながら、お婆さんの話を聞きました。

大木がそびえる移住地に着いた当初の驚き、

それでもそこで生きていくと決心していたから、夫とふたりで開墾に励んで畑や水田を作り上げた。そのお婆さんがいきいきと語るのは、「たしかに開墾は容易じゃあなかったよ。なにが出てくるかわからんしね。よその家では、乳飲み子をかごに入れ、木を切る間、離れたところに置いといたんだよ。そうしたらオンサ（豹）がすきを狙ってさらっていった。そんなこともあった。辛いことさねえ」。

「それでもわたしは開墾していると、見たこともない昆虫、これは大きいのも小さいのも、いろんなのがいるの。蝶々がまた、見事なの。日本のモンシロチョウとかアゲハとかとはまた違う。なんというかも説明できないくらい美しい色合いでね。こういうものに興味があって、ちょっと絵にも描いてみたりするよ。いつか図鑑のようなものがあつたら、あれがなんというものか、どんなふうにいるものか、知りたいの。見るだけじゃなくてね」

「ここでもラジオ局があるのよ。アンデスの声、というの。この前、泉貴美子さんというひと、泉靖一さんの奥様がね、アンデス紀行という話を何回かされて、おもしろかったね、もっともっと、アンデスのことも、インカ帝国ということも、知りたいね。アンデス山脈はここから遠くないのだから」

お婆さんの生き生きとした好奇心、知識欲に満ちた話は楽しく、今夜はこれでお別れをしたのはもう11時を過ぎた真夜中でした。宿へ戻る道は街灯などひとつもなく、懐中電灯だけが頼り。曇って星のない空の下は真っ暗闇。かしましいほどの虫の音とカエルの声。激しい労働の日々でも、知的な好奇心を失わないお婆さん。忘れがたい出会いでした。

この時、まだ私たちは別の出会いがあることを知らないままでした。日本へ帰り、ウカマウ映画集団の自主上映を始めてから11年後、三軒茶屋でウカマウ映画週間を開いたとき、熱心に通ってきた青年がいました。政治的な関心、芸術的、知的な好奇心に満ちたR.M君は、私たちの訪問時、このコロニアで幼年時代を過ごしていたのでした。そのR.M君に強い影響を与え、また日本でラテンアメリカに関わる活動に関心のある誰にも、心からの助力を惜しまないシスター弘田さんも、サンフアンで教会の活動に携わっておられたのでした。

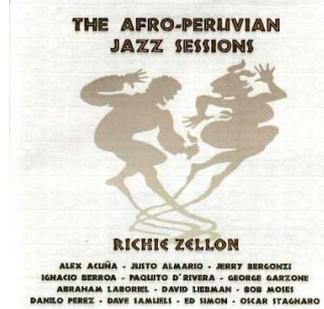
## ペルー・ジャズのあゆみ(3) ペルー的ジャズの離陸

ペルーのジャズのお話も第3回となった。ホセ・イグナシオ・ロペス・ラミレス・ガストンのペルー・ジャズ史をたたき台に、今回はペルーのジャズというものがどのように立ち上がっていったのか、ワールド・ミュージックの流行前夜とも言える1980年代の歩みを追いかけていきたい。

まず始めに、ペルー出身でもっとも有名となったジャズミュージシャンのお話から始めたい。アレックス・アクーニャは、1960年代後半にマンボで有名なペレス・プラードのオルケスタで国際的音楽キャリアを開始した。その後ジャズ・フュージョンバンドとして名高いウェザー・リポートに参加し、1977年のアルバム『Heavy Weather』に収録されている「The Juggler」では、ペルーのマリネラのリズムを特に説明もなく取り入れて演奏している。彼自身はペルー人打楽器奏者としてではなく、プロフェッショナルな技術を持つジャズ奏者であることを期待されてバンドに加入していたため、当時彼の演奏にペルー由来のリズムが求められていたわけでもなかったし、その結果それを特に主張することもなくマリネラのリズムは導入された。

こうしたワールドミュージックのブーム以前のジャズ界における土着的リズムの流用は、その土地性を隠匿されたまま、アメリカ的音楽表現の最前線にそっと紛れ込む形で存在してきた、とロペス・ラミレス・ガストンは指摘する。それが、たとえば「ペルー」という土地性を外国に向けて表明していくかたちに結実していくのは1980年代を通じて徐々に形成され、1990年代のワールドミュージックのブーム以降本格化していった。

1980年代のペルーでは、新たなジャズの潮流が生み出されようとしていた。左派の軍政下での外国(欧米)音楽規制対象には含まれなかったものの肩身の狭い思いをしていたペルーのジャズ・シーンは、ブーガルーやラテンジャズとロック、ボサノヴァの要素を取り込みつつ、徐々にローカルな場としてのペルーという音楽を見だしつつあった。それは1970年代前



リッチー・セジョン『アフロペルビアン・ジャズ・セッション』

半のジャズ的要素を強く持っていたロックバンドのトラフィック・サウンドや、アンデス・フュージョンロックの先駆けであったエル・ポレン、1980年代のデル・プエブロ・デル・バリオといったロックによるペルー的表現の模索の影響も受けていたことだろう。その新たな潮流の立役者は、たとえば BOSSA70 でもギターを担当していたリッチー・セジョンがいるし、ペルー・ジャズという壮大な名を持つクアルテットもその代表格であろう。

リッチー・セジョンは、おそらくアフロペルビアン・ジャズという名前を掲げて活動を始めた最初のジャズマンだったろう。1970年代にフュージョン・ロックバンド、アイジュでの活動を経て1981年に『Retrato en Blanco y Negro』でアフロペルーに切り込んだジャズアルバムを制作(2007年に『Landologia』というタイトルで未収録曲を追加して再発)し、本格的にアフロペルビアン・ジャズの確立へと動き出した。

1990年代に入ると自らアフロペルビアン・ジャズ・レーベル、ソングサウルスを立ち上げ、そこから数多くのアフロペルビアン・ジャズ周辺アーティストたちを世に出した。こうした彼の地道な活動はジャズを模倣ではなく、自らのルーツを問いながら作り上げていく大きな契



ペルー・ジャズ『ライブ』(2001年)

機となったといえる。この流れは、これまでラテン・ジャズと呼ばれた音楽潮流が意味したラテンはあくまでアメリカ合衆国に近かったカリブ音楽のみを指すものであり、他の



ジャン・ピエール・マグネト・イ・セレナータ・デ・ロス・アンデスのアルバム (2011年)

ラテンアメリカ地域が捨象されていたため、新たにアルゼンチンやペルーなどから生まれたジャズ潮流であった。スダカ・ジャズ、もしくはサウスアメリカン・ジャズと呼ばれるジャズの

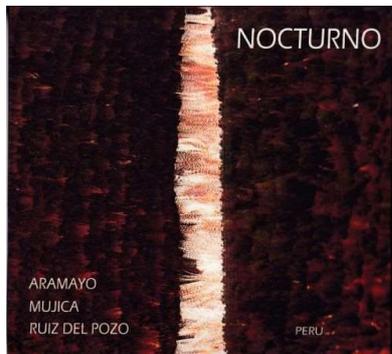
主要な一翼として、このアフロペルビアン・ジャズというジャンルはひとつのポジションを確立しつつあると言える。

またマノンゴ・ムヒカは、バリオの傑出した音楽家であったアブラム・バルデロマルの甥からジャズやビッグバンドのイロハを教わり、1960年代には親の仕事都合でウィーンで過ごしながら彼の地の音楽を吸収した。その後ペルーで音楽活動を始め、1970年代にはスサナ・バカラと演奏などを行っていたという。

しかし、実際のところ彼の目指していた音楽コンセプトは、1983年の記念碑的作品『Paisajes Sonoros』(ドウグラス・タルナヴィエッキと共同制作)がサウンドスケープ的音響音楽を志向した作品であったことから、まったく既成の音楽とは異なるものであったことがわかる。アマゾンからアンデス、沿岸部都市までの環境音に楽器を組み合わせることで生み出されたこの作品は没入感が高く非常に刺激的なものになっている。

さらにオマール・アラマヨやアルトゥロ・ルイス・デル・ポソらとの「Nocturno」(1981)やソロ・アルバム「Tribal」(1996)などで独自の音楽世界を確立しながら、1984年にはカリブ的シャーマニズムの世界をカホンに持ち込んだチョコレートことフリオ・アルヘンドネスらと共にマノンゴ・ムヒカ・クアルテット(後のペルー・ジャズ)を結成している。

そのペルー・ジャズのもう一人の立役者であるジャン・ピエール・マグネトは、もともとトラフィック・サウンドで活躍したサクソ&フルート奏者だった。その後もペルーを代表するジャズの殿堂サッチモの立ち上げ、またジャズフェスティバルを開催するなど、ペルーのジャ



アラマヨノムヒカノルイス・デ・ポソの『ノクトウルノ』(1981年)

ズを牽引する活動を行ってきた。1997年にはワンカヨ地方の多数のサクソにバイオリン、アルパ(ハープ)というスタイルに、ギター、チャランゴ、ケーナ、サンポーニャと

いった楽器を加えた新たなアンデス的ビックバンド編成によるセレナータ・デ・ロス・アンデスを立ち上げて作品を発表し、ペルーのジャズから新たなスタイルを生み出すことを目指している。このマグネトのサッチモで、マノンゴとチョコレートが演奏する中で生まれたのが、マノンゴ・ムヒカ・クアルテットであり、そこからピアノが抜けたことでよりペルビアン・ジャズ的な可能性を生み出したのがペルー・ジャズだった。

ペルーのフュージョン・ジャズの多くがアフロ志向な中、マグネトのアンデス志向が入ることにより、ペルー・ジャズはクリオージョからアフロ、アンデスまでをカバーした、まさに1980年代を代表するペルビアン・ジャズ・バンドとして大きな影響を与えた。ペルー・ジャズは、1989年と1990年にカナダのモントリオール・ジャズ・フェスティバル、1990年にはマイアミのニューミュージック・アメリカ・フェスティバルなどにペルー代表として参加もしている。

さて、こんな感じで今回のペルー1980年代ジャズの旅は終わりとした。新たに離陸したペルー的ジャズという実践の裏側では当然これまで同様アメリカ的ジャズやポップスのジャズなどの多様な世界も継続している。そうした中に新たな実践として確立されたのが、1980年代に生み出されたアフロペルビアン・ジャズやスダカ・ジャズとしてのペルー・ジャズであった。

次回は、1990年代以降に花開いた多様なペルー的ジャズのさらなる飛躍と魅力をご紹介できたらと思っている。ぜひ読むだけでなく実際に曲を聴いてみながらペルーの音楽世界を楽しんでもらえればうれしく思う。

## 民主街道を踏み外さなかったチリ

2021年にはラ米5カ国で大統領選挙があった。エクアドールでは4月11日の決選で財界系右翼ギジェルモ・ラソが勝った。6月6日のペルー決選では穏健左翼ペドロ・カスティージョが当選した。民主に欠けるニカラグアでは11月7日、左翼ダニエル・オルテガが予定通り連続4連覇し、11月28日にはホンジュラスで穏健左翼シオマラ・カストロが圧勝。12月19日のチリ決選は実利的な穏健左翼ガブリエル・ボリッチが圧勝した。ジョヴェネル・モイーズ大統領が7月7日暗殺されたハイチの大統領選挙は2022年に延期された。

影響力の大きさからペルー選挙と並び重要だったのはチリ。11月21日の大統領選挙で候補7人のうち得票上位2人が決選に進出したが、1位進出は何と、故独裁者アウグスト・ピノチエーを礼讃する極右ホセ＝アントニオ・カスト(55)だった。ドナルド・トランプ前米大統領、ジャイル・ボウソナロ伯大統領らの作風を好む反知性派だ。

父ミカエル・カストは第2次大戦中、ナチス軍尉官だった。戦後、身分を偽ってチリ南部に亡命移住し、養鶏で身を立てた。シカゴボーイの兄ミゲルは、新自由主義経済路線をピノチエー軍政に導入した中心人物の一人で、労相、中銀総裁も務めた。

弁護士になったカストは1996年政界入りし、国会下院議員を4期続け、大統領選挙出馬は前回2017年に次いで2度目。公約には「国際的連繋による急進左翼狩り」、「非常事態時にどこでも逮捕できる権限を大統領に付与」、「鉄の秩序」、「人権庁廃止」、「軍政憲法維持」、「反移民受け入れ」を掲げ、「気候変動などない」とうそぶいていた。

このような極右が台頭したのは、2019年10月に始まる長期学生蜂起を「無政府状態」と見なした富裕層、中産層、財界、保守・右翼などが、治安重視のカストの下に結集したからだ。欧州諸国や米州での極右台頭の流れがチリにも到達し、1973年9月11日のクーデターから16年半続いたピノチエー支配の土壌に根を下ろそうとしたのだ。

2019年蜂起は、退陣の瀬戸際に追い込まれた富豪セバステアーン・ピニエーラ大統領が譲歩し、新憲法制定と制憲会議開設の是非を問う国民投票を2020年に実施することで収拾。国民投票の結果は「是」で、2021年5月16

日、制憲議会(CC)代議員155人をジェンダー平等で選ぶ選挙が実施され、女性77人、男性78人のCCが生まれ、7月から起草作業を続けてきた。2022年9月には、起草された新憲法の承認手続きが待つ。

ボリッチは任期4年の大統領に2022年3月11日就任する。それが新自由主義路線を明記した軍政憲法の維持派カストだったら、新憲法草案が骨抜きになる可能性がありえた。そのカストを得票率56%対44%で撃破したボリッチはクロアチア系で、マゼラン海峡に面したマガジャネス州都プンタアレナスに生まれ、首都サンティアゴの国立チリ大学法学部に学んだ。同大学生連盟幹部として2011年の教育無料化闘争を指揮して名を馳せ、下院議員になった。2019年蜂起時には新憲法制定合意を政権党と対話してまとめた。このような手腕と指導力が買われ、大統領選挙出馬に漕ぎ着けた。

公約は「公正な社会建設のための構造改革」、「富裕層への累進課税制度導入」などだが、決選進出が決まると、「企業重役の半数は労働者代表」、「学生債務帳消し」、「不法移民恩赦」といった急進政策を主張しなくなった。「中道化」しないと票が増えないからだ。これにより中道や進歩主義諸党の支持を固め、カストに勝つことができた。

決選3日前の12月16日、ピノチエーの妻ルシーア・イリアルト(98)が死去。カスト陣営は「追悼合戦」と勢いついたが、その効果はなかった。有権者の多くが、軍政回顧趣味の強権政治より、民主政治継続と改革深化を求めたからだ。

ボリッチ次期政権の前には新憲法制定、国会多数派工作、年金制度再公営化、外資信頼醸成、社会政策に必要な経済成長、若者の不満解消、独自外交など重要課題が山積する。だが現在35歳、就任時36歳の、チリ史上最年少にして最多得票の次期大統領は、慎重かつ現実主義で政権の舵を取りつつ荒波に挑んでゆくだらう。

2022年にはコスタ・リカ、ハイチ、コロンビア、ブラジルで大統領選挙が予定されるが、5月のコロンビアでは穏健左翼グスタボ・ペトロに当選可能性があり、ブラジルでは穏健左翼ルーラ元大統領の復活当選が現実視されている。ボリッチの圧勝は、ラ米穏健左翼陣営に弾みをつける。だがボリッチはキューバ、ベネズエラ、ニカラグアの伝統左翼3国とは距離をとるかもしれない。

## コーンチップスとフリホーレスのチーズ焼き

TOTOPOS CON FRIJOLES y QUESO

とっても簡単で、あっという間につくれるメキシコ料理です。料理が苦手な人でもご安心を。

日本にはじめて来た 20 数年前は、日本でトトポス（コーンチップ）はほとんど売っていませんでした。輸入食品の店にはありましたが、とても高価でした。さまざまなメーカーのトトポスが少しずつ輸入されるようになり、その後、いくつかの揚げ菓子のメーカーが、日本風のトトポスを売り出しました。

トトポスは日本やメキシコ、米国、オーストラリアなどで製造されていますが、国によってそれぞれ味がちがいます。日本のトトポスは砂糖が使われ、とくに「サブリタス」の日本製トトポスは甘いのが特徴です。

業務スーパーや成城石井、カルディなどには輸入物のトトポスもあります。今ではほとんどのコンビニでトトポスを買うことができます。

メキシコでは、チーズやハム、その他の食材といっしょにパーティーの食卓にのぼり、ワインやビールといっしょに楽しめます。

はるか昔、アステカ人やマヤ人は、トウモロコシのトルティーヤを天日で乾かし、油で揚げるなどして食べていました。スペイン人がメキシコに来る以前にチーズはなかったもので、今とは異なる方法でトトポスを食べていたのです。



赤インゲン豆



トトポス

### ▽材料（4人分）

- ・トトポス（コーンチップス） 1袋
- ・ピザ用ととろけるチーズ 適量
- ・フリホーレス（インゲン豆）の缶詰 1缶
- ・玉ねぎ 小 1/4
- ・水
- ・サラダ油 大さじ2
- ・ハラペーニョ 適量材料（4人分）

### ▽作り方

1) フリホーレスの缶詰と水（缶詰の半分の量）をミキサーにかける。

- 2) 玉ねぎはみじん切り。
- 3) サラダ油（大さじ2）をフライパンにひき、玉ねぎの色が変わるまで炒める。
- 4) ミキサーにかけたフリホーレスを加える。焦げないようによく混ぜる。
- 5) トトポスを耐熱皿に入れ、その上に4) をスプーンでかける。
- 6) その上に好みの量のチーズをのせる。
- 7) トトポスが焦げないように気をつけながら、オーブントースターで焼く。
- 8) ハラペーニョをトッピング。フォークでも箸でも、手でも食べられます。

## (1) マプーチェにおける自治運動の展望

2021年5月発足のチリ制憲議会(定数155)には先住民枠選出議員17名がいる。10の先住民族に割当てられた先住民枠は、2017年センサスで人口1万人弱だったアフロ系に認められず、5千人未満のイースター島先住民ラパ・ヌイや最南部の3先住民族には1議席が割当てられた。先住民人口約218万の9割を占めるマプーチェには7議席が割当てられ、4選挙区(首都圏1、ビオビオ県2、アラウカ県2、ロス・リオス県以南2)から39名が立候補していた。

マプーチェの諸組織の制憲議会選挙への対応は一様でなかった。選挙に参加したのは、AD MAPU(領域の慣習、1980年)やITL(ラフケンチェ領域アイデンティティ、1999年)といった伝統的組織、ワルマプ構成員(2005年)やマプーチェ政治基盤(2017年)などの政党やマプーチェ首長行政区連合(2013年)などだった。

一方、不参加の立場をとったのは、AWN(全土地協議会、1989年)、ATM(マプーチェ領域連盟、2009年)である。また、領域防衛を掲げ直接行動を展開してきたCAM(アラウカ・マレコ調整委員会、1998年)やWAM(反乱領域闘争、2013年)は制憲議会選挙に反対した。そのため、マプーチェ地域の投票率は全国平均40%を下回る25%にとどまった。

アナ・リャオ、アウカン・ウイルカマンなど著名な伝統的指導者が落選した反面で、都市部に基盤をもつ若い世代や女性が当選したことも特筆に値する。先住民枠17名に地区選挙当選した複数を加えた先住民議員のほぼ全員が中道・左派系で、憲法草案に多民族性の認知、自然との新しい関係性、権利の強化・拡充、民主的な国家建設が盛り込まれる可能性は高い。

制憲議会の発足と次期大統領ガブリエル・ボリックの左派政権によって、マプーチェの領域防衛闘争をテロ行為とみなしてきた旧来のシステムが一掃されることが望ましい。しかし、マプーチェ領域の自決権を迫ってきたCAMなどは、その可能性が極めて低いと指摘している。

出典：<https://nuso.org/articulo/los-horizontes-autonomistas-del-movimiento-mapuche/>

## (2) ペルーの気候変動による国内移住増加

2020年4月の国連難民高等弁務官事務所の報告では、災害による居住変更の98%が気候不順に起因するという。過去10年で年平均約2千万人の避難民が、気候関連の事象が原因で発生したという。その数は紛争や暴力の2倍以上だが、ほとんどが国内にとどまるとされる。

ペルーの国内移住モニターによると、2008年からの12年間に、66万人が自然災害で避難したとされる。気候変動の主要因はエルニーニョだが、国内の3つの生態系は移住の大波を引き起こす危険性を内包する。人口が集中するコスタは、エルニーニョによる早魃、高温や異常気温、森林火災、強風の影響を受けている。シエラは、高温、極寒や凍結に加え、最大の懸念である氷河後退で住民の28%が移住する可能性がある。セルバでは、頻発する洪水と深刻な早魃、浸食、森林破壊の危険性がある。

ペルーの人口の3分の1は、頻発する自然災害の影響を受ける国土の半分に相当する不安定な空間で暮らしている。900万人以上が豪雨、洪水、地滑り、土石流、700万人が低温や極低温、350万人近くが早魃にさらされている。最悪のシナリオでは、セルバでの極度の熱ストレス、シエラの氷河の完全消失、コスタ住民を危険にさらすエルニーニョ現象激化で、数万人の移住者を生むと予測されている。

コスタでは、漁師がエルニーニョ現象に左右される海洋資源の有無により移動し、北部では農民が早魃時に収入を多様化するため一時的に移住する。シエラでは、寒波や凍結・霜害、氷河後退による水不足、降雨変化や早魃、北部の洪水などで、歴史的に大きな流出・移住が加速している。セルバでは、農民は雨季に一時的に移住し、食糧不安を軽減している。移住地は、河川敷、氾濫原、都市周辺の水供給に問題のある丘陵など、脅威や危険を伴うことが多い。

気候変動に伴う移住の多くは国内であり、国家の責任だが、パンデミックで社会的不平等が顕著になったペルーその能力は期待できない。

出典：El Correo de la UNESCO, 2021, no.4

[https://unesco.org/ark:/48223/pf0000379210\\_spa](https://unesco.org/ark:/48223/pf0000379210_spa)

### (3) 共同耕作で乾燥化と闘うグアラニ女性

ボリビア南部タリハ県ヤクイバのヤク・イグア先住民領域の3共同体(ヤグアクア、ティムボイ・ティグアス、ポソ・デル・アンタ)に住む約50名のグアラニ女性は、2019年から共同耕作を通して、地域の砂漠化と限られた食物を守る闘いを展開してきた。最近5年間、この地域は乾燥化が進み、深刻な霜害にさらされてきた。ポソ・デル・アンタ共同体の境界ではメノナイト派(プロテスタントの一派)が、遺伝子組み換えのトウモロコシや大豆を栽培し、大規模な森林伐採が進み、多くの小川が干上がった。生き延びることが難しいと考える若者は移住し土地は放棄されてしまう。

このような状況でティムボイ・ティグアスとポソ・デル・アンタの女性は領域の中で共同耕作を実践してきた。コロナ禍での健康リスクからより良い食事が取れることを目指し、野菜の生産を多様化してきた彼女たちが運営する共同耕作地は700人の食の安全を守っている。

ヤグアクア共同体では女性たちが、8月から9月に野菜の種を蒔く。土壌に栄養を与えるためにレタス、大根、玉葱、フダンソウ、ビーツを植え、レモンやオレンジなどの木陰を利用して、生産力を向上している。播種直後の種が猛暑で枯れないように定期的な散水を欠かさない。ポンプは燃料があれば週に数回使えるが、ほかはバケツで水をやる。

ロサベル・ヴィジャルバ・ソトさん(33)は、ティムボイ・ティグアスの共同耕地で、伝統的に栽培されてきたカボチャを自家用と小売用に作っている。主要食の一つトウモロコシの原種を栽培、種子をとり、違法に侵入している遺伝子組み替えの種子に対抗している。共同体で作業を共有することはグアラニ文化に不可欠だ。共同耕作を通して、多くの家族が食の多様化の必要性に気づき、家庭菜園を始めている。

共同体の女性の目標は、共同作業を通して人々の結びつきを強めながら家族が食べるための新しくより良いやり方を学び続け、移住による土地の空洞化を避け、また共同体の境界まで急速に広がる遺伝子組み換えの大豆栽培から領域を守ることだ。

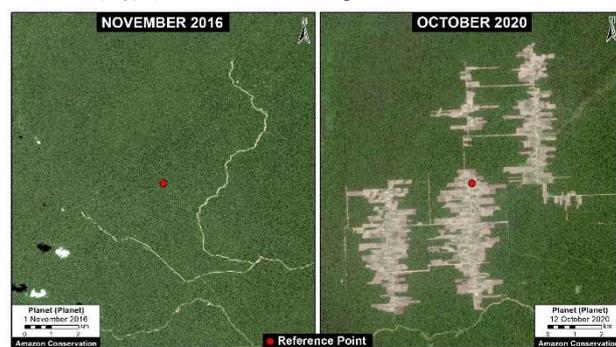
出典 <https://www.periodistasporelplaneta.com/blog/fotorreportaje-mujeres-guaranies-combaten-la-sequia-con-huertos-comunales/>

### (4) メノナイト派農民、4千ha 森林伐採

ボリビアやベリーズから移住したドイツ系保守派メノナイトの農民は、2017年以降、ペルー・アマゾンに4入植地を設立し、約4千haの森林を伐採したとされる。2020年10月までに設立された3入植地ティエラ・ブランカ1・2(ロレート県)、マシセア(ウカヤリ県)では、3,400ha以上の森林破壊が報告されている。2021年には、ティエラ・ブランカとマシセアの間に新入植地パドレ・マルケスが設立された。アンデス・アマゾン監視計画によると、2021年1月~11月に、第4入植地(421ha)と既存入植地(74ha)で495haが伐採された。

ペルー環境省は、入植地リーダーを刑事告発し、ウカヤリ県政府は、森林伐採許可を受けていないティエラ・ブランカとマシセアの入植地に1,100万ソル(約3億円)の制裁金を科したとされる。マシセア入植地に隣接する先住民族シピボ・コニボの共同体も不正手続きで領域内に入植した農民の退去を求めている。

これらの入植地では、おもに遺伝子組み換えの大豆と米の大規模栽培が行われている。2010年代後半にメノナイト派の入植活動によって森林破壊が促進された事例は、この地域だけでなく、メキシコ・ユカタン半島、コロンビア東部オリノコ川流域、パラグアイ・チャコ地方、ボリビア・サンタクルス県やタリハ県の低地部などでも報告されている。



ティエラ・ブランカ1入植地森林伐採(2016年/2020年10月)



マシセア入植地のトラクター 大豆のため伐採された森林

出典 : Servindi, 15 de diciembre, 2021  
<https://www.actualidadambiental.pe/opinion-menonitas-y-el-ambiente-en-america-del-sur/>

## 編集後記

新型コロナウイルス感染第5波が収束し、今年こそ、何とか外遊できるのでは、という期待はもろくも打ち破られたようだ。オミクロン株の爆発的拡大で、**そんりさ**の印刷・発送作業ができずPDF版を配布したり、レコム総会が今年もリモートとなったりする事態となるかもしれない。

だがコロナ禍とはいえ、今号で紹介した米国へ向かう多くのハイチ移住者のように、世界の人々の流動性や交流は少しも衰えることはない。日本のメディアでは報道されなかったが、2021年の秋から年末にかけて、数百人のサパティスタの老若男女、ならびに10名前後の先住民全国議会(CNI)のメンバーが、「生命のための巡回」として欧州諸国を歴訪していた。CNI派遣団には、**そんりさ** 176号に寄稿していただいたメキシコ・オアハカ州フチタンの女性ニサさんも含まれていた。欧州巡回(侵略)の成果がどのようなものか、知りたいものである。

小林致広

今回の「そんりさ」印刷作業は東京で、2022年4月9日(土)

発送作業は関西で、2022年4月16日(土)の予定です。

参加いただける方は、[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) まで連絡ください。

Vol. 178 エクアドル大統領選挙と未来の行方	Vol. 175 『裏切者』が米墨政府の汚職と麻薬カルテルの内実を暴く
Vol. 177 コロンビア 混乱の背景	Vol. 174 ナルコ回廊再びー北部最前線
Vol. 176 メキシコ・オアハカ州地峡部の自律的女性議会	Vol. 173 コロナ禍のラテンアメリカ
	Vol. 172 ナルコ回廊再びー北部最前線

## メーリングリスト

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) まで、ご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

## 会員の種類

☆会員：年 8,000円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出  
☆学生会員：年 5,000円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出  
☆賛助会員：年 10,000円(一口) 総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出  
☆購読会員：年 4,000円 …『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

## レコム連絡先

〒616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町20-15  
太田方  
TEL 075-862-2556(留守電)  
お問い合わせは、E-MAIL、手紙、もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。  
ホームページ：<http://www.jca.apc.org/recom>  
E-mail：[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org)  
Facebook：<https://www.facebook.com/recomsonrisa/>

郵便振替口座：00110-7-567396

日本ラテンアメリカ協カネットワーク  
レコム口座 191万2506円  
グアテマラ基金口座 78万4125円  
(2022年1月現在)

**そんりさ (SONRISA) 179号**

2022年1月15日発行

日本ラテンアメリカ協カネットワーク (RECOM)  
定価 400円

